新年がスタートします。
夢に向かって、一歩踏み出す1年にしませんか。
一歩踏み出す人が増えれば、やがてまちも飛躍します。

夢への一歩

皆さんのチャレンジ宣言

2012年　あなたの一歩踏み出したいことは？

髙松保乃香さん・笠間夏貴さん・大森眞結さん
（伊予高３年）

野村洋子さん・恭平くん（神崎）

（左から）東地真吾くん（松前小1年）・山本康平くん（松前小5年）
東地海都くん（松前小６年）・東地拓磨くん（松前小３年）

常盤美代子さん　（筒井）

山﨑紀弥さん（徳丸）・明智あかねさん（南黒田）

（左から）續田沙也加ちゃん・山田遥菜ちゃん
成田朱里ちゃん・安藤佳乃ちゃん（松前小3年）

重川潤さん・美那さん（昌農内）

二宮ひとみちゃん（松前小4年）

白石町政
4期目・始動

一歩上を行くまちづくりを目指す

4期目のスタートに当たり、白石町長にまちづくりへの決意と抱負を聞いた

松前町長選挙で再選を果たした白石勝也町長の4期目がスタートしました。

白石町長は、12月12日午前9時に初登庁。役場玄関で約100人の職員から出迎えを受けました。

庁舎内で行なわれた訓示では「これからも自立・共生・飛躍に向けて、健全財政を堅持し、町政を推進していく覚悟です。皆さんの力を結集し、町民と一体となって歩んでいきたい」と決意を述べました。

白石町長は、平成11年11月、新人3人による選挙戦を制して初当選しました。

記者時代の経験から、行政の見えにくさ分かりにくさを解消したいと考えていた白石町長。と同時に、全ての町民に平等で公平な町政が執られることが不可欠と考え、「見える、分かる、クリーンな行政を」という精神で3期12年を全力で走ってきました。

この間、各地域の文化祭や敬老会など、できる限り地域へ出向き、町民と対話してきた白石町長。町民の不安や地域の課題などを直に聞き、可能な限り町政に反映してきました。そんなフットーク抜群の行動力は、大勢の町民から支持され、人望を集めました。

「町民の皆さんと行政が知恵と力を合わせる『町民総参加』で、一歩上を行くまちづくりの実現を目指したい」

松前町のさらなる飛躍に向け、白石町長は再び町政推進のかじを取ります。

職員に出迎えられながら初登庁する白石町長

―3期12年を振り返って

1期4年、その4年間をどのようにやるかを常に重視してきた。それを3期積み重ねてきたと実感している。

1期目就任当初から変わらないのは「見える、分かる、クリーンな行政を」という精神。できる限り地域へ出向き、同じ目線で話すことを心がけた。施策以前に、この姿勢を貫き、それを町民の皆さんに理解してもらえたことが、この12年の松前町発展の一端を担ったと考える。

―4期目挑戦への経緯は

「権腐10年」。この言葉を自分への戒めとして心に持ってきた。首長という立場が長くなれば惰性、偏りやおごりが出る恐れがある。だからこそ、2期目からこの言葉を胸に刻んできた。

4期目については非常に悩んだが「町がいい流れに向かっているから継続を」という町民の方々の声を受け、応えたいと思った。年齢的には不安もあったが、気力・精神力は十分にある。これまで同様に町のため、町民のため、4期目に挑むことを決めた。

―4期目の重点施策は

防災と環境。

特に防災については東日本大震災を教訓に、安全・安心なまちづくりのために避難場所になる小中学校の耐震化を進める。長年改修ができていなかった北黒田海岸の防波堤の整備も急務。第1分団消防詰所の整備、自主防災組織を中心とした避難訓練など、住民相互の助け合いのできる地域防災力の向上を図りたい。

環境政策については、ごみの減量化や省エネルギー化に一層力を入れ、バイオマスタウン構想の実現を推進したい。未来を担う子どもたちが関心を持つよう、体験を通した環境教育の充実も欠かせない。

この他、国体に向けたホッケー場の建設も具体的に進める段階に来た。車両貨物基地の移転に伴う沿線整備と併せて計画したい。国体後は町民の健康増進施設として役立つと期待している。

義農作兵衛の遺徳を伝えるために、老朽化した義農神社整備についても検討する必要がある。住民の声を聞きながら、後世へ伝えられる「記念館」「顕彰館」としての位置づけなども考えていきたい。

―笑顔あふれるライフタウンづくりの抱負は

これまで以上に町全体の団結心の醸成を図りたい。町民大レクリエーション大会の開催や松前町版B級グルメ（地域の味自慢）大会など、全町民が自由に参加でき、楽しめるものを提案していきたい。

子どもたちの海外派遣再開も目標の一つ。今の子どもたちに国際感覚は必要。単に復活させるのでなく、姉妹都市提携などを視野に入れた国際交流を進めたい。どのような都市が松前町に合うのか、子どもたちに投げかけるのもいいだろう。松前町オリジナルの国際交流を目指したい。

これから重要になってくるのは、町民みんなが意見やアイデアを出し合って一緒にまちをよりよくする「町民総参加」のまちづくり。これが自立したまちとなる一番の力。一人一人の力、地域の力を結集していこう。

東日本大震災を受けて私たちが大事にしなければならないのは、困っている地域があれば、松前町民みんなで支援しようという気持ち。そして、松前町だけがよくなるのではなく、互いに支え合い刺激し合うことが大切。共に一歩前へ、一つ上へ進んでいこう。

2011年　私が踏み出した一歩

町民もまちも、さまざまなことに一歩踏み出そうとしています。
けれど、実際に行動に移したり、続けたりするとなると、くじけそうになることもあります。
常に今の自分を超えていくには、どうすればいいのでしょうか。松前町にはこんな一歩を踏み出した人がいます。

フルートと人形片手に単独で被災地支援へ

Person 01

Kawada Osamu

河田　修さん

神崎

69歳の春。河田修さん＝神崎＝はフルートを見つめ、自問自答していました。

「行くべきか…」

3月11日に発生した東日本大震災。テレビを見ていても自分の無力感ばかり。60代最後の奉仕と思って、河田さんは決断します。

人形ケースにフルートを入れ、車に積み込みました。自炊道具（携帯用ガスコンロ、手鍋など）を購入し、水、日持ちの良い食糧、毛布、滑り止めを含めた寒さ対策を準備。

「どこの避難所に行くか、人数、市町村名を新聞で確認。該当の社会福祉協議会に連絡し、衣食住は自己解決済みであること、フルートと腹話術を使った一人ボランティアで少しでも笑顔を届けたいことを説明しました」

具体的な日時と場所は現地についてからということで、岩手を目指し、4月29日の真夜中に車で出発。米原、新潟、磐越道経由で東北道を北上しました。仮眠のためサービスエリアに入ろうとしても、警備員が満杯の手信号。やっと駐車場を見つけたのは、出発して20時間後でした。

どの避難所にも笑顔はありませんでした。子どもたちは人形のケンちゃんに少し興味を示すも、笑ってくれません。次はフルート。みんなに吹いてもらっていると、一人の中学生が思いきり息を吹き込み、「ゴー」という音。すると一人のお年寄りが「その音はトイレの水を流したときの音じゃ」と、やっとみんなが笑ってくれたと言います。

岩手と宮城の避難所数カ所を回って、河田さんは5月8日に帰宅しました。

「私のボランティアはこれで終わりと思っていました。でも、帰ったら原発で福島が大変なことになっていて」

河田さんは6月21日、福島へ向けて出発。さらにもう一歩踏み出しました。

東京からUターン アパレル業から農業へ

Person 02

Ukena Yoshiharu

浮穴佳温さん

東古泉

松前町役場から東へ5分。鮮やかな緑色のレタス畑が広がっています。作っているのは浮穴佳温さん（30）＝東古泉＝。実は浮穴さん、2年前に東京のアパレル系会社を脱サラ。農業をすることを決意し、愛媛県にUターンしてきました。

きっかけは電車の中吊り広告でした。

「ふと見た中吊り広告に、『農業で稼ぐ』ってあって。当時、営業をやってて、自分が納得しない商品でも売らなきゃいけないことに違和感を感じていました。売るなら自分が納得したものを売りたかった。だから、「ありかな」ってピンときて」

思い立ったら即行動する浮穴さん。さっそく、本やインターネットで農業について調べました。調べれば調べるほど、その気持ちは確信に。

「自分でつくって自分で売れる農業は、究極の経営だと思いました」

気がつけば就農場所を考えていました。茨城、千葉、栃木など、農業大国が近くにある中で、浮穴さんが選んだのは、地元愛媛でした。

「生まれ故郷ですからね。地元を盛り上げたいと思って。松山市出身ですが、松前町には祖母が住み、以前祖父が兼業農家として農業に携わっていたときの畑が2反あったので」

そして21年8月、前の職場で知り合ったという美雪さんを連れ、Uターン。結婚、新居建築、就農―と、目まぐるしい2年を過ごしました。

現在は5反でレタス、枝豆、ネギを栽培しています。

「今、とても充実しています。手を掛けようと思えばいくらでも愛情を注ぐことができる農業。楽しくて仕方ありません。いずれは法人化したい」と夢を語る浮穴さん。人生のモットーは、「やらずに後悔するよりも、やって後悔する」。

浮穴さんが踏み出した一歩は、確実に前へと向かっています。

一歩を支えたヒト・モノ・コト

一歩を踏み出すために必要なことって何でしょう。
先に紹介した二人の舞台裏の「ヒト・モノ・コト」を探ります。

単独で被災地支援に向かった河田修さん。「自分の衣食住を構えていくこと」など、ボランティアの基本を学んだのは、日赤で受けたボランティア講習会でした。

河田さんは「何気なく受けたボランティア講習。でもそこからのつながりで、救命救急講習や防災士養成講座など、いろんな講座を受講しました。こうした講習で防災に対する関心を高めていたことが、一歩踏み出す勇気につながりました」と話します。

少しでも笑顔を届けたいと思って使ったフルートと腹話術は、青木尚之先生に出会ったことがきっかけで始めたもの。

「定年退職後、ギターをやろうと思って入ったのが先生のギター教室でした。『ひよこ会』は福祉施設への慰問を精力的に行っていて、そこで人を楽しませる喜びを感じました。先生は明るく元気で、心から尊敬する人です。ボランティアの楽しさを教えてくれました。元気なうちは、貢献しなければという心を持つようになったのは、先生のおかげです」ときっぱり。

うまくなったら卒業というシステムのひよこ会。河田さんも数カ月前に卒業しましたが、慰問には参加しています。ギターではなく、ひよこ会の生徒に教えてもらった腹話術と、ギターの次に始めたフルート、そしてユーモアあふれる司会で、大勢の仲間とともに笑顔を届けています。

青木先生は「河田さんは、何にでも興味を持って取り組むパワフルな人。こちらも刺激を受けています。慰問では名司会をしていただいて、本当にありがたい」と話していました。

河田さんにギターを教えた
Aoki Naoyuki
青木尚之さん

人と人とのつながりは くじけそうな一歩を 支えてくれます

2011年に一歩踏み出した二人。二人の活躍の舞台裏には、それぞれに知られざるドラマがありました。

河田修さんは、日ごろから、あらゆるものに触れ、大勢の人に出会っています。その中で、恩師や切磋琢磨する仲間に出会い、一歩踏み出す勇気を育てています。そして東北に踏み出した河田さんの一歩は、一歩踏み出そうとする被災地の人たちを、温かく支えました。

浮穴佳温さんは、明確な目標を持って、新しい一歩を踏み出し続けています。悩んだときは、アドバイスをくれる先輩、温かく包んでくれる家族が、その一歩を支えてくれています。

河田さん浮穴さん共に、今の二人があるのは、踏み出す一歩があったからこそ。その勇気を自分が持つことはもちろん重要ですが、周りの環境、支えも大切です。

頑張れと言ってくれる人、親身になってくれる人がいたら、その人のためにもやらなければと、また、勇気が湧いてくるものです。

人は一人では生きていけません。誰かを支えたり、支えられたりしながら生きています。

指導してくれる先輩、刺激し合える仲間、受け入れてくれる家族…。大勢の人と人とのつながりは、くじけそうな一歩を支えてくれます。あなたの踏み出す一歩が、誰かの一歩を支えます。

浮穴さんに農業を教えた
Shigekawa Satsuko　Tetsu
重川颯子さん　鐵さん

新規就農をした浮穴佳温さん。農業経験が全くなかった佳温さんは、伊予農業指導班に紹介された重川鐵さん・颯子さん夫妻＝昌農内＝のもとで、1年間の農業研修を受けました。

「最初は分らないことばかりでした。基本から丁寧に教えてくださって、本当に勉強になりました」と振り返ります。

鐵さんは当時のことを「最初は正直心配でした。農業＝楽しいというイメージだけで飛び込んだんじゃないかと思って」と話します。だからこそ、自分の生き様を見せることで、農業の大変さを伝えてきた鐵さん。実際、佳温さんは、大変だと感じたと言います。それでも、重川さん夫婦が手間暇かけて作物を作る様子にふれ、自分で作るやりがいを少しずつ覚え始めると、農業の面白さを感じずにはいられませんでした。

颯子さんは「研修が終わった今でも、我が子のように心配です。浮穴くんのことをまわりが報告に来てくれることもあるんですよ。彼が感じている以上に、大勢の人が見守っているんだと思います。新規就農してくれたことは、私たちの励みです」と満面の笑みを浮かべます。

鐵さんは、「私たちは既成観念が邪魔するけど、浮穴くんは挑戦する。そういった違う感覚に刺激を受けました。これからも刺激を受けたいし、何かあればいつでも頼ってほしい」と話します。研修が終わってもつながりは消えません。

浮穴さんの妻
Ukena Miyuki
浮穴美雪さん

そして、佳温さんのそばにはいつも、陰ながら支える美雪さんの姿があります。

佳温さんは「知らない土地に来るのは不安だったと思いますが、付いてきてくれて。いつも支えてくれています」と感謝します。

美雪さんは「研修中は心配でした。今までぬくぬくの職場だったのに、一転して肉体労働。おいしいお弁当を作って、あったかいお布団を敷いて、お風呂をためることぐらいしかできませんでした」と謙遜しますが、そんな美雪さんの心遣いが、佳温さんにとっては一番の支えでした。

佳温さんの一歩は、たくさんの優しさで支えられていました。

その一歩が夢を育てる

一歩踏み出している憧れの先輩、魅力的な友達、ライバルや親を見たとき、あんなふうになりたい（憧れ）、負けてられない（悔しさ）、もっと頑張ろう（意欲）と、いろんな感情が湧いてきます。それは「私もやってみたい」につながります

青野遼さん（松前中1年）と翔くん（岡田小4年）兄弟は、松前町が誇るソフトテニスのトップアスリート。兄の遼さんは、松前中学校ソフトテニス部に所属。23年度、愛媛県中学生学年別ソフトテニス大会1年生の部で準優勝。22年度は愛媛県ソフトテニス連盟ランキング小学生の部で2位に輝きました。弟の翔くんは、現在北伊予ソフトテニススクールに所属。四国小学生学年別ソフトテニス大会4年生の部で優勝。春季小学生ソフトテニス大会県予選4年生以下の部で優勝。全国大会へ出場することが決まっています。

指導しているのは、父剛さん。北伊予ソフトテニススクールのコーチを務めています。また、松前ソフトテニスクラブの副部長で、自身も大会に積極的に参加し、活躍しています。そんな親子はいつだって二人三脚で、一歩上を目指してきました。

実は父剛さんも、祖父の實則さんに習い、テニスを学びました。

剛さんがテニスを始めたのは中学生のとき。「遊びで父とするテニスが楽しかったし、父のテニスに憧れた」と話します。以来、剛さんはテニス一筋。大学卒業後、實則さんが所属する松前ソフトテニスクラブに入部しました。

また、母愛子さんも、剛さんの影響で同クラブでテニスを始めました。愛子さんは「家族みんなで汗を流せるのがうれしい」とにっこり。

剛さんは、實則さんからテニスに勝つための手段だけでなく、礼儀や協調性を学んだと話します。そんな剛さんもまた、子どもたちに礼儀や協調性の大切さを伝えています。「技術が上手くなると、どうしても傲慢になってくる。それはさせたくない。遼は中学1年。小学生のときからやっているからテニス歴は長いけど、部活は新入部員。自分の立場を考えて行動してほしい」と願います。

「お父さんを超えたいと思ってテニスを始めた」という遼さん。「練習でたくさんアドバイスをしてくれて、大会のたびに送り迎えをしてくれる。お父さんがいるから頑張れる」と感謝の気持ちを忘れません。

實則さんも、「テニススクールや遠征試合への対応に、感心する。我が子だけでなく、他の子どもたちを見る中で、視野が広がっている。安心して孫のことを任せられる。最近では、私への思いやりも感じられる。親と子というのは、ある程度ライバルであり、敵対するもの。でも今では、認め合える存在になりつつあります」と話します。

翔くんがテニスを始めたきっかけは「お兄ちゃん」。翔くんにとってお兄ちゃんは「一番の憧れ」です。

そんな翔くんに兄の遼さんは、「翔、頑張れ。僕ももっと頑張る」と頼もしい口調で笑顔を見せます。

ともに小学1年生からテニスを始めた兄弟。剛さんは「試合経験を積ませる。これが強みとなる」と話します。試合の帰りには、必ず車の中で反省会。そんな中で、子どもたちと課題を見つけ、次の目標を掲げます。

遼さんは、強くなるために大切なことについて、「目標を一つ一つクリアしていくこと」と話します。1回決めて、クリアしたら次の目標を立てる。これは、遼さん自身が試合に勝てるようになり、次の大会の目標が見えてくるようになって、身につけた術。今の目標は、「総体で県大会ベスト8に入ること」と言い切ります。翔くんの目標は、「毎回の練習を全力ですること。そして、国体に出ること」。

青野親子は、テニスを通じ、互いの成長を確かめ合いながら、一歩ずつ歩んでいます。その一歩が人を育て、夢を育てます。

夢は、ただ努力するだけではつかめません。目標を一つ一つクリアしていかなければならないのです。夢は進化していきます。だけど、夢が自分が夢を育てているのではなく、成長した夢は競争でつかみ取るものでもありません。スポーツ、受験など人と競うこともあるかもしれません。けれど相手との競争は、手段でしかありません。挑むのは自分です。

大切なのは、今の自分を超えていくこと。あなたの一歩を見た人が、憧れ、悔しさ、意欲など、いろんな感情を抱きます。それは「私もやってみたい」につながります。「応援したい」につながります。手を引いたり、一緒に歩んだり、背中を押してくれたりします。だからあなたの一歩が二歩になり、他の誰かの一歩になります。

毎日、今の自分を超えていく。
それが一歩踏み出すということ。
一歩踏み出せば、出会いが増えます。
支え合いが生まれます。
そうやって、
まちに一歩踏み出す人が溢れていく。
やがてまちは飛躍します。